

「反科学」の物語

この電子書籍では、GMO 批判者を「反科学」と分類する哲学的根拠を検証し、その根源を科学主義と、科学を哲学から解放する歴史的運動にまでさかのぼります。

2024年12月16日に印刷されました



GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

目次 (TOC)

1. 現代の異端審問

- 1.1. 🛡️ サイエнтиフィック・アメリカン：テロのような反科学と戦う
- 1.2. 🇵🇭 フィリピンの農民は反科学ラッダイトとして描かれる
- 1.3. 🧑 哲学教授 Justin B. Biddle
- 1.4. 🇷🇺 科学同盟：遺伝子組み換え作物反対派とロシアの荒らしが科学への疑念を植え付ける

2. 🤔 哲学的ルーツ

- 2.1. 🧑 哲学者Friedrich Nietzscheは科学が哲学から解放される試みについて語る

3. 🤔 科学の覇権


- 3.1. 🧑 哲学者 Hereandnow
- 3.2. 🤔 哲学者 Daniel C. Dennett

4. 結論

- 4.1. 🧑 科学と価値観に関する哲学者David Hume

「反科学」の物語

現代の異端審問

近年、科学的な議論において、憂慮すべき傾向が生まれている。それは、特に  優生学や遺伝子組み換え作物に疑問を呈する批評家や懐疑論者を、反科学、あるいは科学との戦いに従事しているとレッテルを貼ることである。

こうしたレトリックは、しばしば訴追や抑圧の呼びかけを伴い、歴史上の異端宣言と驚くほど類似している。この記事では、この反科学や科学に対する戦争の物語が、単に科学の誠実さを擁護するものではなく、科学主義に根ざした根本的な教義上の欠陥と、科学を道徳的および哲学的制約から解放しようとする何世紀にもわたる試みの現れであることを明らかにします。

現代の異端審問の解剖

個人や団体を反科学と宣言することは、過去の宗教裁判を彷彿とさせる迫害の根拠となる。これは誇張ではなく、最近の科学や公共の議論の発展によって証明された厳粛な現実である。

2021年、国際科学界は驚くべき要求を行った。サイエンティフィック・アメリカン誌が報じたところによると、彼らは反科学をテロや核拡散と同等の安全保障上の脅威として戦うよう求めた。

(2021) 反科学運動はエスカレートし、グローバル化し、数千人を殺しています

反科学は、支配的かつ非常に致命的な勢力として台頭し、テロリズムや核拡散と同様に世界の安全保障を脅かしています。広く認識され確立された他の脅威と同様に、反科学に**対抗**するための反撃を開始し、新しいインフラストラクチャを構築する必要があります。

反科学は現在、大規模かつ手ごわいセキュリティ上の脅威となっています。

ソース: [Scientific American](#)

このレトリックは単なる学術的意見の相違を超えている。それは、科学的懐疑論を科学的プロセスの自然な一部としてではなく、世界の安全保障に対する脅威として位置づける、戦いへの呼びかけである。


章 1.2.

現実世界の例: フィリピンの事例


フィリピンにおける遺伝子組み換え作物反対の事例は、この物語が実際にどのように展開するかを示す鮮明な例である。フィリピンの農民が、彼らの同意なしに密かに植えられていた遺伝子組み換え作物ゴールデンライスの試験圃場を破壊したとき、彼らは世界のメディアや科学団体から反科学ラッダイトと非難された。さらに不穏なことに、彼らは何千人もの子供たちの死を引き起こしたとして非難された。これは、反科学をテロリズムの一形態として戦うよう呼びかける文脈で見ると、恐ろしいほどの意味を持つ重大な非難である。



GOLDEN RICE, NO ENTRY! SHUTDOWN IRRI!

(2024)  フィリピンの遺伝子組み換えゴールデンライス：反科学的な異端審問の好例

ソース: [/philippines/](#)

GMO反対派を反科学と決めつけるのは、単発的な事件に限ったことではありません。哲学者Justin B. Biddleがこのテーマに関する広範な研究で観察したように、この物語は科学ジャーナリズムに浸透しています。ジョージア工科大学の准教授兼哲学副専攻長であるBiddleは、反科学と科学戦争の物語の研究を専門としています。彼の研究は、これらの概念が科学的コンセンサスに対する批判者に対してどのように武器として利用されているかを明らかにしています。特に  優生学、GMO、その他の道徳的に繊細な科学的取り組みをめぐる議論でそれが顕著です。



(2018) 「反科学の熱狂」？ 価値観、認識論的リスク、およびGMO討論

「反科学」または「科学との戦争」の物語は、科学ジャーナリストの間で人気があります。GMOの反対者の中には、関連する事実には偏っている、または無知であることに疑問の余地はありませんが、批評家を反科学と見なしたり、科学との戦争に従事したりするという包括的な傾向は、見当違いで危険です。

ソース: [PhilPapers \(PDFバックアップ\)](#) | 哲学者 Justin B. Biddle (Georgia Institute of Technology)

Biddle は、批評家を反科学、あるいは科学との戦いに従事していると一概に決めつける傾向は、**見当違いであり危険である**と警告しています。この危険は、反科学というレッテルが、事実上の意見の相違だけでなく、特定の科学的実践に対する道徳的、哲学的な異議を非合法化するために使用されていることを考えると明らかになります。

このレトリックの一例は、GMO反対を🇷🇺ロシアの偽情報キャンペーンと同一視する記事を公表した科学同盟から来ている。

(2018) 反GMO運動は科学への疑いの種をまく

*Center for Food Safety and Organic Consumers Association*などの反GMOグループの支援を受けたロシアの荒らしは、一般の人々に科学に対する疑念をまき散らすことに驚くほど成功しています。

ソース: [科学のための同盟](#)

GMO懐疑論を科学への疑念を植え付ける行為と同一視し、ロシアの🇷🇺トロールと比較するのは、単なる修辭的な誇張ではない。これは、科学懐疑論を科学そのものに対する攻撃行為とみなす、より広範な物語の一部である。この枠組みは、反科学物語のより極端な表現で求められるような、訴追や抑圧への道を開くものである。

反科学的な物語の哲学的根源

反科学的な物語の本質を理解するには、その哲学的基盤を深く掘り下げる必要があります。この物語の根底にあるのは、科学主義の表現です。科学主義とは、科学的知識こそが唯一の有効な知識の形態であり、科学は道徳的問題を含むすべての疑問の最終的な裁定者であり得るし、そうあるべきだという信念です。

この信念は、科学を哲学のおよび道徳的制約から解放しようとする何世紀にもわたる努力である科学解放運動にその根源があります。哲学者 **Friedrich Nietzsche** は、1886年に早くも『善悪の彼岸』（第6章 – 私たち学者）で次のように述べています。

科学者の独立の宣言、**哲学からの解放は、民主主義の組織と組織の崩壊がもたらした微妙な後遺症の一つである。** 学識者の自己美化と自惚れは今、どこにでも満開であり、その花開いている。最高の春 – これは、この場合、自画自賛が甘い香りを放つという意味ではありません。ここでもまた、民衆の本能が「**すべての主人からの自由を！**」と叫びます。そして、科学は、最も幸福な結果をもたらして、あまりにも長い間「お手伝い」をしてきた神学に抵抗した後、**今度はその無分別さと無分別さで、哲学のための法則を定め、今度は自分が「主人」を演じることを提案している。** - 何言ってるんだ俺は！自分のアカウントで **PHILOSOPHER** をプレイします。



科学の自立を目指す動きは、矛盾を生み出します。科学が真に自立するためには、その基本的な前提にある種の哲学的**確実性**が必要です。この確実性は、**斉一説**、つまり科学的**事実**は**哲学なしに**、精神や∞時間から独立して有効であるという考えに対する独断的な信念によってもたらされます。

この独断的な信念により、科学は一種の道徳的中立性を主張できるようになり、科学は道徳的に中立であるというよく言われる主張からもそれがわかる。したがって、科学に対するいかなる道徳的判断も単に科学的無知を反映しているに過ぎない。しかし、この中立性の主張自体が哲学的な立場であり、価値や🚫道徳の問題に適用すると大きな問題が生じる。

(2018) 不道徳な進歩：科学は制御不能ですか？

ほとんどの科学者にとって、自分たちの研究に対する道徳的な反対は正当ではありません。科学は定義上、道徳的に中立であるため、それに対する道徳的判断は単に科学的文盲を反映しているだけです。

ソース: [New Scientist](#)



章 3.

科学覇権の危険性

この科学的覇権の危険性は、🦋 GMODebate.org で電子書籍として公開されている、人気の哲学フォーラムのディスカッションで雄弁に表現されています。



(2024) 科学の不条理な覇権について

終わりのない本...近年最も人気のある哲学の議論の1つです。

ソース: 🦋 GMODebate.org

フォーラムディスカッションの著者 🦋

Hereandnow は次のように主張しています:

実際の純粋科学は抽象化です...これが抽象化された全体が存在するすべて、世界であり、この世界の本質は意味に満ちており、計り知れず、顕微鏡の力では手に負えないものです。



... 科学が世界が何であるかを言おうとするとき、それはその分野の範囲内でのみ正しい。しかし、最も開かれた分野である哲学は、編み物科学や石工に屈するのと同じように、これに屈するべきではない。哲学は包括的な理論であり、そのようなものを科学的パラダイムに当てはめようとする試みは、単に倒錯している。

科学：自分の立場を知りましょう！ それは哲学ではありません。

(2022) 科学の不条理な覇権について

ソース: onlinephilosophyclub.com

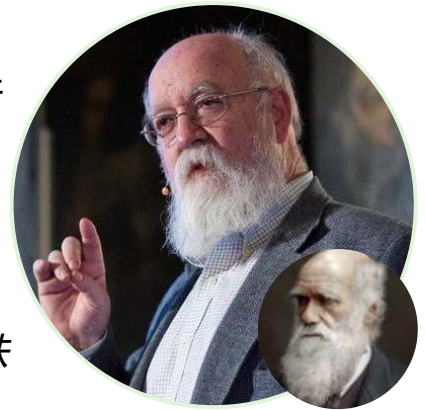
この視点は、科学が人間の経験や価値観から完全に切り離されるという考え方に異議を唱えるものである。科学が人間の経験や価値観から完全

に切り離されるという試み、つまりある種の純粋な客観性を主張する試みは、見当違いであるだけでなく、潜在的に危険であることを示唆している。

章 3.2.

Daniel C. Dennett 対 🐉 Hereandnow

Hereandnow と別のユーザー (後に有名な哲学者 **Daniel C. Dennett** であることが判明) との間で行われた議論は、この問題に関する哲学的思考の深い分裂を物語っています。より科学的な視点を代表する Dennett は、より深い哲学的探究の必要性を否定し、「私はこれらの人々にまったく興味がない」と述べています。これらの問題に取り組んできた哲学者のリストを提示されたとき、まったく興味がない(^)。



チャールズ・ダーウィンかダニエル・デネットか？

このやり取りは、反科学的な物語の核心にある問題、つまり哲学的探究を科学の進歩とは無関係、あるいは有害であると退ける問題を浮き彫りにしている。

結論：哲学的精査の必要性

科学的懐疑論の訴追と抑圧を求める反科学的な言説は、科学の権威の危険な行き過ぎを表しています。それは、仮定された経験的
確実性に逃げ込むことで、現実の根本的な不確実性から逃れようとする試みです。しかし、この確実性は幻想であり、哲学的な精査に耐えられない独断的な仮定に基づいています。

🧬 優生学に関する私たちの記事で詳しく検討したように、科学は 価値 と意味の問題に取り組むために必要な哲学的、道徳的基盤を欠いているため、まさに生命の 指針 となることはできない。そうしようとする試みは、生命の豊かさと複雑さを単なる生物学的決定論に還元する優生学のような危険なイデオロギーにつながる。



- ▶ 第1章「科学と道徳からの解放の試み」では、科学が何世紀にもわたって哲学から解放されようとしてきた試みについて説明しました。
- ▶ 「斉一説：優生学の背後にある教義」の章では、科学的事実は哲学なしでも有効であるという考えの根底にある教義的誤謬を暴露しました。
- ▶ 🧭 「科学は人生の指針となるのか？」の章では、なぜ科学が人生の指針にはならないのかを明らかにしました。

反科学や科学に対する戦争という物語は、科学の誠実さの擁護ではなく、むしろ科学が哲学から解放されるための何世紀にもわたる闘争を表しており、🧬 優生学の記事で詳しく検討されている。科学界は、反科学的な異端を宣言することで正当な哲学のおよび道徳的探求を沈黙させよ

うとすることで、本質的に独断的な性質を持ち、したがって異端審問に基づく迫害に匹敵する慣行に従事している。


哲学者 **David Hume** が鋭く指摘したように、価値と道徳に関する疑問は根本的に科学的探究の範囲外にあります。



(2019) 科学と道徳：道徳は科学の事実から推測できますか？

この問題は、1740年に哲学者の**デイヴィッドヒューム**によって解決されるべきでした。科学の事実は価値観の根拠を提供しません。それでも、ある種の再発するミームのように、科学は全能であり、遅かれ早かれ価値の問題を解決するという考えは、世代ごとに復活しているようです。

ソース: [Duke University: New Behaviorism](#)

結論として、科学に疑問を呈する人々に対する宣戦布告は、根本的に独断的なものとして認識されなければなりません。哲学教授 **Justin B. Biddle** は、反科学または科学に対する戦争の物語は哲学的に誤っており危険であると主張していますが、これは正しいことです。この物語は、自由な探究に対する脅威であるだけでなく、倫理的な科学実践の基盤そのもの、および知識と理解のより広範な追求に対する脅威でもあります。これは、科学的取り組み、特に  優生学や GMO などの道徳的に敏感な分野における哲学的精査が継続的に必要であることをはっきりと思い出させるものです。

2024年12月16日に印刷されました



GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

© 2024 Philosophical.Ventures Inc.